
随 想

恩師 A 先生

中村 保幸[※]

Yasuyuki Nakamura

この春、当京都女子大学で長年教育に携わってこられた教育者・研究者である田口弘康先生が定年退職される。田口先生には私がこの大学に赴任してからの2年の短期間しか一緒に過ごす機会は無かったが、実に多くのことを教わり感謝に耐えない。教育者田口先生に接していると20数年前ボストンで教えを頂いた恩師 A 先生のことを思い出される。田口先生と A 先生ではもちろん異なる点も多いのだが、教育者として何か共通する点がある。A 先生の名字は Abelmann (ボストンではエイベルマンと呼んでいた) で、まさに A 先生であるが、未だに強烈な印象が残っている。この経験を少しでも多くの人と共有したいと思い、記憶をたどってこの一文を編もうとする。

米国留学

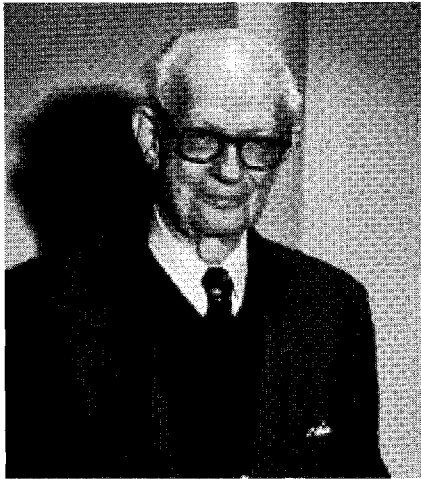
私が米国留学したのは大学卒業した後、2年間母校の大学病院で研修を受け終えた1976年7月からである。通常私たち医師の海外留学は卒後数年間の臨床経験の後、大学院に入学するなどして研究を行い、医学博士を取得した後さらに研究を続けて研究者になることを決めた段階に実施することになる。つまり医学部卒業後10年ほど経過してから留学することになるので、35歳以上になってからである。私が通例に比べて早めに留学を決めたのは、その目的が心臓病学の進歩がめざましい米国において臨床研修を受けさらに研究を始めることにあり、なるべく若い時期に留学経験を積んだ方が効果的と判断したためである。この判断に至ったのは日本での恩師からのご示唆も大いに影響した。米国留学1年目はシカゴ市で過ごし、内科全般の研修を受けた。私は留学する前京都でシカゴから留学中の米国人相手に少人数で会話のレッスンを6ヶ月ほど受けた。最後にはその先生の英語は完璧に聞き取ることが出来たのだが、シカゴにいた途端周りの人が話す英語がほとんど理解できない。

現地の人々の話す早さと用いる単語の違いには大変驚いた。日本留学中の米国人の先生は日本人にも判りやすいゆっくりとした教師英語を話していたから私にも理解できたのだ。それでもシカゴに着いて6ヶ月を過ぎる頃から英語の聞き取りや会話に少しずつ慣れてきた。医者同士の白熱した議論にはなかなか加われなかったが、患者さんのゆっくり繰り返す訴えは十分理解できるようになった。その後の2年間はボストンに近いウースター市に移り非侵襲的心臓検査法に関する臨床研究を行った。侵襲的心臓検査法である心臓カテーテル法を含め心臓病学の幅広い研修と研究のためボストン市に移ったのはその後の1979年7月からであった。

モーニングレポート

ハーバード大学医学部には附属病院というものはなく、臨床各科の学部教育、卒後研修および臨床研究はいくつかの関連病院で行われている。マサチューセッツ総合病院 (Massachusetts General Hospital, MGH) はその代用的な病院である。私が心臓病学の研修を受けたのはハーバード大学医学部の関連教育病院の一つベス・イスラエル病院で、世界で最初に体内式ペースメーカーが植え込まれた病院としても有名である。ボストンでの2年間に心臓病学専門医となるべき教育を受けた。教育内容は心臓病学全般、コンサルテーション、侵襲的・非侵襲的心臓検査法の習得、CCU¹⁾での医療、および研究などに亘り、その身分は心臓病学フェロー (cardiology fellow) といった。私が専門医教育を受け始めた頃には Abelmann 先生は部長から退かれ、その任を後輩に譲っておられたが、教授としてフェローに対する教育は引き続き行われていた。Abelmann 先生は当時50歳代後半、身長が190 cm程で、多くの米国人から見てもかなりの長身であり、ドイツ語訛りが少し残る英語で話され、大変な威厳があった。私たちは教える上級医師に対しても John や Jack など first name で呼ぶのが通例であったが、Abelmann 先生に対してだけは皆畏敬を込めて

[※]本学生生活福祉学科教授



Dr Abelmann と呼んでいた。First name である Walter と話しかけるのは Abelmann 先生のごく限られた旧友だけであった。

心臓病フェローの仕事の一つに輪番で自宅待機し、週末や夜間にレジデントやインターンの相談に応じることがある。必要に応じて病院に向いて重症例の検査を行い、治療方針の相談に応じるコンサルテーションを行うのだが、月曜から金曜の毎朝、前夜または週末に起こったことを上級指導医師に報告することをモーニングレポートと呼ばれていた。報告する相手が Abelmann 先生の時は大変である。例えば心臓病フェローが前夜に入院させた急性心筋梗塞の症例について報告する場合、発症時の症状、発症時間、入院時の診察・検査所見、治療状況と経過、簡単な既往歴、家族歴を報告するわけである。既往歴に狭心症疑いで別の病院で以前診察を受けていたことが判ると、Abelmann 先生の場合はその病院に問い合わせ可能な限りあらゆる情報を収集しようと努力したかを問う。努力の証拠がないと判明すると激的な叱責がくる。長身から発せられる叱責は天井から降り注ぐようである。そうしてこう言われる、「君はこの教育プログラムに残るのはふさわしくない怠け者だ。出て行け Get out of here!」。実際には追い出されたフェローは存在しなかったのだが、「Get out of here!」を聞く当事者にとっては大変な恐怖である。また報告内容の中で疑問点があると報告途中に「What?」と言って質問される。この what は「ワット?」でなくドイツ語訛りで「ヴァット?」と聞き取れる。この「ヴァット?」にも緊張させられる。さらに報告内容に何か重要な点が欠落しているとそのことについて質問され、フェローが正しく答えたあと「Is that important? (これは無視してよいことなのか?)」と疑問文だが語尾を下げておっしゃる。

Abelmann 先生の「Is that important?」を聞くとまた冷や汗が出る。

あるとき私が下壁心筋梗塞の結果洞不全症候群²⁾を来し、頻回に心停止を起こす一例を報告した。そして一時的ペースメーカーを植え込み、もうすぐ恒久的ペースメーカーを外科医に植え込んで頂く手筈であることを告げた。Abelmann 先生は「もう少し長く経過観察し、自然回復がないのかを見る必要はないか。外科医は頼まれば喜んで何でも手術をやりたがる。本当に必要な手術だと判断するのは君たち内科医の役割である。」とおっしゃる。私は文献を示し、心筋梗塞に合併した洞不全症候群の大多数が結局恒久的ペースメーカーを植え込むことになることと反論すると、「無作為割付試験³⁾を行ったわけではないそのような研究報告は科学的ではない」と譲られない。実際にその患者さんを診察して頂き、ペースメーカーが無ければいかに頻回に心停止を来すかを理解して貰ってやっと手術の許可が出た。Abelmann 先生はこの種の議論の時につこりされていた。議論を楽しんでおられる風情があった。

別の時あるフェローがコンサルテーションを受けた患者さんがソビエトからの難民で、ロシア語しか解せず、病歴を詳しく聴取することが出来なかったと報告すると、Abelmann 先生は「この病院には外国語を解する多くのボランティアがいる。ロシア語を解するボランティアは必ずいる。君は通訳ボランティアを捜す努力をしたのか? 英語を解さないからといって患者が受ける医療の質に差別をもたらしてはならない!」と厳しく言われた。

Abelmann 先生自身がペースメーカー植え込み術を受ける

心臓病フェローとして10ヶ月が過ぎようとしていたある日、Abelmann 先生が突然完全房室ブロック⁴⁾を起こされた。Abelmann 先生は研究のため Chagas 病⁵⁾という重篤な心不全を起こすブラジルの原虫 (trypanosoma cruzi) を取り扱っておられたことを知っていた私たちは、Abelmann 先生が Chagas 病に罹患し、その合併症として完全房室ブロックになられたのではないかと心配した。しかし幸いそうではなく、先生の心臓の収縮力は正常で、心不全はなく、単独な完全房室ブロックであったことが判り、安心した。治療は恒久的ペースメーカー植え込み術である。恒久的ペースメーカー植え込みのため入院されたとき、Abelmann 先生の旧友である Benson 先生から私に電話があった。その時私はまだ Abelmann 先生の病気のことは知らなかった。Benson 先生曰く

「今日本に留学中の Abelmann 先生の次女 Nancy には Abelmann 先生の今回の病気のことについては君からは伝えないようにして欲しいというのが Abelmann 先生からの伝言である。Nancy が無用な心配をしてはいけないから、落ち着いてから Abelmann 先生ご自身から連絡するとのことである」。これが Abelmann 先生の木目細やかな気配りの現れである。Nancy は文化人類学研究のため当時在学中のハーバード大学から一時同志社大学に留学中であった。Abelmann 先生は病棟や研究室では非常に厳しかったが、それは教育的配慮からであって、本当は教育愛、人類愛に満ちた方であった。フェローの家族の名前もほとんどすべて覚えておられ、卒業していった元フェローの写真を集めたアルバムを楽しげかつ思い出深げに目を細めてよく眺めておられた。写真の欄外にはそれぞれのフェローについて詳細な書き込みがあった。元フェローがその後どの方面で活躍中かをよくご存知であった。しかし Abelmann 先生は潔癖で妥協が少ないため、彼の心配りや教育愛は簡単には理解されない。そのため Abelmann 先生に反発的な米国人のフェローや教員医師、あるいは一部の開業医⁶⁾ が少なからず存在した。このこともあって Abelmann 先生は部長の任を解かれたのだと思う。

Abelmann 先生の何年か前の誕生日に当時のフェロー達はドンキホーテの木像をプレゼントした。脇目もせずつただひたすらに風車小屋に槍を持って突進して行くドンキホーテの木像を Abelmann 先生はことのほか気に入っておられたご様子で、教授室にいつも飾ってあった。

Abelmann 先生との回診

Abelmann 先生はドイツ語圏のスイスのある町にお生まれで、初等教育はスイスで受けられたと聞く。そのためドイツ語の他、フランス語、イタリア語にも堪能でおられた。Abelmann という名字はドイツ系ユダヤ人の特徴をよく示す。Abel と Mann の二つに分割でき、おまけに Abel は旧約聖書の初めの方に出てくる名前である。アダムとイブには二人の息子が出来たが、その名がカインとアベル (Abel) である。アベルは兄カインに殺害される。ユダヤ教徒は唯一の神を信じ、旧約聖書を読むが、キリストに対しては一預言者としては認めるものの、救世主：神とは認めない人々のことである。従って新約聖書は認めない。Abelmann 先生のご家族はナチスドイツの迫害を避けて米国に移られ、先生自身の中・高等教育は米国で受けられた。ロチェスター大学医科部入学前はハーバード大学で文化人類学を修められた。米国では医学部ないし医科大学の受験資格は 4 年生大学の卒業であ

るので、医師になるためには日本より 2 年長くの教育を受ける必要がある。

ある土曜日、フェローは私が、教員は Abelmann 先生が待機当番であった。土曜日の朝は待機当番医が受け持ち患者さんを回診することになっていた。従ってその土曜日は Abelmann 先生とご一緒に回診する機会を得たわけである。受け持ち患者の中にはユダヤ人のお婆さんがおられ、その方は英語を全く解せず、イエディッシュ語を話した。Abelmann 先生はイエディッシュ語をほとんど話されないとのことだったが、イエディッシュ語は基本の多くはドイツ語に由来するらしく、Abelmann 先生はドイツ語を駆使して詳しい訴えをそのユダヤ人のお婆さんから聴取することに成功された。また別の患者さんはベトナム人の女性で、この方も英語を解せなかった。Abelmann 先生は “Do you speak English?” “Parlez Français?”⁷⁾ の順でその患者さんに質問され、フランス語が解ると判断されるとフランス語で病状を聞き取っておられた。なるほどベトナムは旧フランス領、教養ある人は英語がわからなくても、フランス語が解るのである。Abelmann 先生との回診だと、殆ど通訳ボランティアの助けを借りなくて済んだ。Abelmann 先生にとっては英語を解さないからといって患者が受ける医療の質に差別をもたらしては断じてならないのだった。

ユダヤ系住民と教育ママ

米国在住のユダヤ系住民は全人口の 2% にしか過ぎないが、アメリカ全国平均で医師の 14% はユダヤ系住民だとされている。しかしボストンやニューヨークなど都会の、しかも大きな教育病院には半数以上の医師がユダヤ系である。古代エジプト時代から迫害を受け続けてきたユダヤ人達は、今は平和で幸せであっても、いつ周囲の異教徒が再度迫害を始めるか判らないという潜在的不安を常に抱えている。したがって、子供達には十分な教育を授け、世の中が変わったり、別の国に難民として逃げて行ったとしても安定した生活が保障される職業に就かせなければならないとユダヤ人の親たちは考える。いくら子弟が優秀であっても政府高官に任官させようという親はまれである。才能ある子供達は芸術家になる場合もある。ユダヤ系の音楽家、画家、映画監督は実に多数存在する。しかし多くのユダヤ人の親が子に望む職業は医師、次に弁護士などである。そのためユダヤ人の母親は教育熱心である。Jewish mother とはこのような母親のことで、“教育ママ” と似たところがある。Jewish mother の口癖は「My son, the doctor (私は息子を医者にするのだ)」である。Abelmann 先生のお母さんもいわ

ゆる Jewish mother であつたと思う。親が教育熱心で、Abelmann 先生ご自身も勉強が好きだったに違いない。

さて私がお世話になったボストンのベス・イスラエル病院の名はヘブライ語の「神の家」に由来するという。病院の設立にはユダヤ人の親たちが大いに関与した。ハーバード大学医学部を卒業したユダヤ教徒の子弟は当時病院に就職することが困難であつた。このため、医大生の親たちが資金を集め設立したのがベス・イスラエル病院である。1916年のことであつた。勿論現在ではベス・イスラエル病院にはユダヤ系以外の医師も多いし、ベス・イスラエル病院以外の病院でも多くのユダヤ系医師が活躍している。ベス・イスラエル病院の入院・外来患者の宗教は雑多である。ベス・イスラエル病院は臨床研究も盛んで、いろいろな部所から情報を世界に発信している。

Abelmann 先生はユダヤ系米国人には違いないが、そう厳格なユダヤ教徒ではなかつた。食べるものは選ばれなかつたし、ユダヤ教の儀式にも参加されなかつたようだ。厳格なユダヤ教徒 (orthodox Jew) とは頭頂部にヤマカという円盤状の帽子をかぶり、髭を生やして戒律に従つた生活をする。食べるものには制限があり、豚は禁止、魚類で鱗のないエビ、カニも食せない。食物はユダヤ教が許可するコーシャ食でなければならない。厳格なユダヤ教徒はもちろん断食の期間には断食を行う。結婚相手はユダヤ教徒でなければならない。Abelmann 先生はそのようなことを全く気にしなかつた。改革派ユダヤ教徒 (reformed Jew) なのであろう。奥様はキリスト教徒であつた。Abelmann 先生は初婚で、奥様はお嬢様を一人連れた再婚であつた。きっと熱烈恋愛だつたのだろう。ドンキホーテの所以である。Abelmann 先生には連れ子のお嬢さん1人の他、ご自身のお嬢様である Nancy と二人の息子さんがおられる。

Abelmann 先生の教育方針と研究方法

Abelmann 先生の教育方針は厳格そのものである。我々に対し症例の可能な限り全ての情報を収集することを求められる。手抜きは許されない。フェローの時期に完璧に情報を収集するという態度を習得させることによって、その後心臓病専門家になつたときに、その習慣が持続すれば患者さんにとつても、医学の進歩にとつても好ましいことだと考えておられた。人間業をしようと思ふときりがない。人命に関わる職業である医師にとつて、勤勉と不断の努力は重要である。

Abelmann 先生の専門は心臓病学の中でも心筋疾患である。つまり心臓の筋肉＝心筋が傷害される疾患が研究対象である。心筋疾患を来す病気の原因物質＝病因

は無数と言つて良いほど宇宙に存在する。ウイルス、細菌、リケッチア、真菌などの微生物；原虫などの寄生虫；金属イオン、大気・水の汚染物質、アルコール；脚気などのようよう栄養障害；甲状腺機能亢進症など内分泌疾患に合併するもの；膠原病に随伴する心筋疾患；神経疾患に随伴する心筋疾患などである。心筋疾患の分類名を列挙すると教科書1頁以上の表になる程である。Abelmann 先生はこの分野の先駆者である。先駆者の仕事として全ての心筋疾患を網羅的に研究し、記載することにある。このことによつて次世代の研究者が一特定分野を選んで深く研究することが可能となる。Abelmann 先生が医学部進学前にハーバード大学で文化人類学を専攻されていたことと先生の研究姿勢には因果関係があるように思える。Abelmann 先生のお子様達には医師になられた方はおられないが、ご自身のお嬢さんが文化人類学方面で活躍中である。

初めてボストンで接した頃の Abelmann 先生の年齢に私自身ももう近づきつつある。私なりに先生の教育方針、研究の態度、人類愛などを消化修正して Abelmann 先生 of 精神を次世代に伝えて行ければ幸いであると考えている。

注釈

- 1) CCU=Coronary Care Unit：冠疾患集中治療室。急性心筋梗塞などの治療を行う病院内の施設。
- 2) 洞不全症候群：心臓の調律を発する洞房結節が原因で徐脈を起こす病気。
- 3) 無作為割付試験：疾病の治療法や予防法の有効性を評価するために行なわれる。対象者を、乱数表やくじ引きなどの手段を使って、ランダムに二つの群に分けて異なる治療法を実施し、その効果を検討する方法。
- 4) 完全房室ブロック：心房からの電気刺激が心室に繋がらなくなり、心室は心室内の刺激発生機構によつて収縮は継続するが心拍がすごくゆっくりであるため、心不全や失神を来す疾患。
- 5) Chagas 病：ラテンアメリカの貧しい田舎全般に見られる、寄生虫の *trypanosoma cruzi* によつて引き起こされる慢性病であり、究極的には心筋が広汎に傷害され、心不全となり長年の経過を経て命を落とす。この原虫は吸血性のサシガメ (triatomine bug) によつて伝播する。この病気は、居住環境を改善することで制御可能であろうと長い間言われてきた。
- 6) 開業医：米国では大学病院もオープンシステムを取り入れているため、開業医が自分の受け持ち患者を

直接入院させ、入院中の患者を開業医が診察に訪れる。診察料の一部を開業医から大学病院に支払う。

7) “Parlez Français?” : フランス語で「フランス語はお

話になりますか」の意味。学校で習う「Parlez-vous Français?」は外国では滅多に聞かなかった。